

ベトナム華人社会における言語生活の調査研究

著者	三木 夏華
別言語のタイトル	The language life of Chinese community in Vietnam
URL	http://hdl.handle.net/10232/11821

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720147

研究課題名(和文) ベトナム華人社会における言語生活の調査研究

研究課題名(英文) The language life of Chinese community in Vietnam

研究代表者

三木 夏華 (MIKI NATSUKA)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：80363604

研究成果の概要(和文)：ベトナムでは80年代後半のドイモイ政策を境に在越華人や華語教育に対する政策が大きく変化する。本研究ではベトナムで最も華人人口の多いホーチミンにおいて2009年から2010年にかけて華人の使用する中国語方言、特に広州方言中心に字音、語彙、語法などの調査を行った。その結果、在越二世、三世と代を重ねることに差異が現れることが分かったが、これは彼らが受けた華語教育などの言語生活における環境と深い関わりがあることが聞き取り調査により明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In Vietnam the policy toward the ethnic Chinese and the education of the Chinese language changed completely after Doi Moi in 1986. From the year 2009 to 2010 I did the field researches about on the Guangzhou dialect in Ho Chi Minh City, which is the most populous region of the ethnic Chinese in Vietnam. Our investigation items are the 3000 character readings, vocabulary of 600 words and grammatical investigation of 100 example sentences and the other. As a result, the inter-generation difference of linguistic features can be seen, and through fact-finding on the spot I analyzed it is deeply affected by the surrounding such as the education of the Chinese language.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度			
2007年度			
2008年度			
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ベトナム 華人 広州方言

1. 研究開始当初の背景

東南アジアの華人・華僑の用いる漢語方言の研究分野において、最近中国において多くの調査報告が出されているにも関わらず、これらの研究報告は調査対象がシンガポール、マレーシアなどの地域に集中していて、ベトナムについての報告は現在においても皆無に等しい。また、ベトナムの国内情勢の

変化に目を向けると、1975年の解放後、経済面のみならず、政策の上でも厳しい対華人政策を採ったため、大量の中国系住民の国外流出を引き起こし、一時華人が激変した。1986年のドイモイ政策実施後、国外脱出した華人の帰国が許され、現在では人口が回復し、在越華人や華語教育に対する政策が大きく変化した。そのため、80年代半ばを境とし

て華人の母語である中国方言（変種）に大きな変化が見いだせる可能性があった。筆者はそれまで中国国内の言語、特に方言を研究対象としてきたが、ベトナムは東南アジアの国々の中でも歴史を通して中国との関係が深く、中国との言語接触について考えるための最適の研究対象と考えた。また、最近では中国、台湾、シンガポール、マレーシア等の近隣諸国とも経済交流が盛んになり、ベトナムの華人は重要な役割を果たしている。華人、華僑の言語研究が進む中、このような重要な位置を占めるベトナム華人について総括的な言語研究を行うのは中国語学、社会言語学などの多くの学問領域に貢献できると思われる。

2. 研究の目的

ベトナムで最も華人人口の多いホーチミンにおいてフィールドワークを行い、華人の中でも使用人口の最も多い広州方言を中心に記述研究を行う。また、世代ごとに言語的特徴の差異について中国本土の広州方言との比較などから分析を行い、差異が生まれる要因について華語教育や言語生活と関わりがあるか考察を行う。さらにその結果をこれまでに出されたベトナムの近隣諸国の華人の使用する中国方言の報告と照らし合わせ、各国の言語環境や教育政策を踏まえた上で、華人を取り巻く社会背景によって中国方言にどのような差異が生じるかについて論じる。

3. 研究の方法

調査対象地域は、ベトナム・ホーチミン市の中でチョロンと呼ばれる第五区を中心とした地域とその周辺とした。

①方言の記述調査に入る前にアンケート調査を行い、インフォーマントの言語使用環境を予め把握しておいた。アンケートの内容は基本項目（出身地、年齢、性別、学歴、職業、両親の出身地と使用している言語、本人の就学以前に使用していた言語、母語以外の使用可能な言語）以外に、使用可能な言語の使用頻度や能力、どのような場面で使用するか等についても項目を増やし、詳しく回答するように求めた。アンケート調査の結果は社会言語学的な観点から解釈する上で役立つので、記述調査の対象者以外にも出来るだけ回答者を増やすよう心掛けた。また、インフォーマントが学生の場合は現在の学校教育における華語の位置づけが明らかになるようにアンケート項目を考えた（例えば小、中学校別に華語教育が一週間に何時間行われていたか尋ねる等）。

②記述調査（音韻、語彙、文法）は主に話者の母語である中国語の方言（変種）を対象とし、調査表は『方言調査字表』（中国社会科

学院語言研究所、1955年）、『漢語方言調査簡表』（丁声樹、李栄著、科学出版社、1956年）、『漢語方言調査詞彙手冊』（中国社会科学院語言研究所、1955年）、『漢語方言語法調査手冊』（黄伯榮等著、広東人民出版社2001年）などを基に作成し、約三千字の字音調査、約六百語の語彙、約百例の文例について広州を祖籍とする在越華人に聞き取り調査を行った。インフォーマントには一日六時間を上限として聞き取り協力してもらった。調査は録音機器、ビデオカメラなどを使用して記録し大学の講義にも教材として利用した。

③以上の記述調査の結果を中国本土の広州方言に関する調査報告と照らし合わせて比較し、アンケート調査の結果も踏まえた上で分析を行った。なお、使用した文献は『広州方言研究』（李新魁等著、広東人民出版社1995年）、『広東省誌・方言誌』（広東省地方誌編纂委員会編、広東人民出版社2004年）等である。

④華語だけでなく、ベトナムの主要言語であるベトナム語が華人の使用方言にどのような影響を与えるかについても調査を行った。

⑤ベトナム以外の東南アジア諸国における華人、華僑の言語との比較対照も行い、各国の歴史、地理、社会背景、華人華僑に対する言語政策などを踏まえた上で結果を分析した。

4. 研究成果

3の研究方法で述べた方法により、ホーチミン市の華人の話す広州方言と中国本土で話される広州方言との比較分析を試みたところ、声調や韻母に大陸や香港などの地域とは異なる現象が確認された。主要な音声的特徴は以下の通りである。なお、インフォーマントは在越二世、三世の各世代から選び、両者の世代間の差異も同時に考察した。

【韻母】

①在越二世、三世ともに[0n]は[□n]に合流する（例：論[l□n]、敦[t□n]、春[□□□n]）。李新魁等(1995)の記述による[□t]は[ut]と合流して[ut]と発音される（例：末[mut]、割[kut]、喝[xut]）。

②在越三世では①の現象に加え、華語の影響を受けていると思われる字音が見られた。例えば、1. “盖”、“開”等の字音の韻母を[□i]ではなく[□i]と発音する、2. 三世は二世同様に“難”[nan]“飯”[fan]のように、中古音の寒、山、刪韻に属する文字の多くを[an]で発音する。ただし、在越三世にはk子音で始まる文字（“簡”、“間”、“奸”など）の韻母を[in]と発音する現象が見られた、3. 中古音の寒韻牙音、喉音は、二世はは[□n]なのに対し、三世は[□n]と発音する、などの特徴が見られた。

③中国本土の広州方言において口語や擬態

語に現れる[□u]、[□m]、[□n]、[□p]、[□t]はホーチミン市では在越二世、三世ともに観察できなかった。

【声調】

①二世の華人の話す広州方言は本土と同様に9つの声調があり、三世では8つである。

②本土の広州方言では、陰平は一般的に55と53の調値が両方存在するが、ホーチミンでは如何なる条件の下でも高降調53で発音される例は見られなかった。これは二世、三世ともに共通の特徴である。

③陽平について、在越三世の華人は11、または21で発音し、時に陽去と合流することもある。例えば「油（陽平）」と「又（陽去）」を[j□u21]、「離（陽平）」と「利（陽去）」を[l□ei21]と同音と見なすような例が多く見られた。二世では21で発音し、陽去と完全に合流している。さらに陽上については、三世は低昇調13だけでなく、低平調11で読まれる現象が見られる。

以上の結果から、世代が進むにつれ、韻母や声調の合流が拡張して音韻体系が簡略化し、華語の影響も強く受けていることが分かる。このように一方の方言の世代間の差異に着目した分析はこれまでの世界各国の華人言語研究には見られず、同分野の研究手法に大きな意義をもたらすと考えられる。

また、世代間でこのような差異が生まれたことについて、言語環境についてのアンケート調査結果を分析したところ、以下のような理由が考えられた。

ベトナムでは1976年の南北統一から1979年の中越戦争期に渡り、徹底した中国系住民の同化政策が行われ、華語教育の場も厳しく制限されるが、1986年のドイモイ政策以降、経済の開放政策と中越関係の改善により、華語教育が盛んになる。この80年半ばを境とした変化はインフォーマントの言語環境にも大きな影響を与える。二世のインフォーマントは第5区の小学校、中学校（普通教育学校）で華語の授業を受けていたが、当時は70年後半から80年代前半で、小学校でも週に1時間しか華語の授業はなく、華語の授業以外は教授言語がベトナム語だったという。一方、三世のインフォーマントが小学生の頃にはすでに華語教育は盛んになり、小学生の時に3年間、華語普及センターで華語を習い、大学でも2年間学んだ。そのため北京語の水準は二世のインフォーマントより高いが、日常生活で広東語を話す機会がより少なく、漢字はほとんど華語を媒介として学習してきた為か、方言字音で読む能力が極めて低い。この現象は三世全体に共通している。このように両者の華語教育の機会と方言の使用状況の違いが広州方言の音韻体系にも大きな影響を与えていると考えられる。

また、東南アジアの華人・華僑の用いる漢

語方言の研究分野において、最近中国において多くの調査報告が出されていて、例として『首届海外漢語方言国際研討會論文集』（2009年暨南大学出版社）、『泰国的三箇漢語方言』（2010年暨南大学出版社）などの著作が挙げられる。これらの書籍にはベトナムの近隣諸国の華人の方言概況が報告されているため、これまで行ってきたベトナム・ホーチミンにおける広州方言の調査結果を、先行研究を用いてマレーシアやカンボジアの同方言の特徴と比較し、両地域の広州方言の差異を社会言語学的な視点から考察を行った。その結果、マレーシアのような華人人口が比較的多く、華人独自の文化基盤をある程度確立している国家では、本土の広東語と同じ音韻体系を保持した上で、更に英語やマレー語など他の公用語から借用語を豊富に取り込み、独自の音韻体系を形成していることが分かった。例を挙げると、本土の広州方言で外来語を表すのに使用される[□u]、[□m]、[□n]、[□p]、[□t]の5つの母音だけでなく、マレー語や英語の借用語を表すための[□]、[□]の二つの単母音も存在し、このうち[□]は本土の広東語ではほとんど見られない母音である。それに対し、ベトナムのように華人の現地勢力への融合化が進んでいる国ではこのような特徴は見られず、逆に方言の音韻体系の簡略化が起りやすいことが分かった。音韻体系の簡略化はベトナムと同様に現地勢力への融合化が進んでいるカンボジアでも観察することができる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

① 三木夏華「越南胡志明市華人粵話音系」『中国方言-語言学与文化的意蘊』上海教育出版社、（印刷中）査読有。

② 三木夏華「ベトナム・ホーチミン市における広州方言語彙」『鹿大史学』58号、2011年、35-44頁、査読無。

③ 三木夏華「東南アジア華人社会における広東語—ベトナム・ホーチミンとマレーシア・クアラルンプールとの比較を通して—」『クロスボーダーの地域学』、竹内勝徳・藤内哲也・西村明編、2011年、南方新社、85-104頁、査読無。

④ 三木夏華「ベトナム・ホーチミン市における華人の広州方言の音韻体系」『人文学科論集』72号、2010年、鹿児島大学法文学部、147-176頁、査読無。

〔学会発表〕（計 1 件）

① 三木夏華 「越南胡志明華人広州話音系」
2010 年 5 月 1 日 韓国・漢陽大学校、第六屆中
国地域文化與語言国際研討会。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木 夏華 (MIKI NATSUKA)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：80363604

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし